

# 解決不可能な課題従事行動に対する三種類のフィードバックが後の解決可能な課題遂行への予想に及ぼす影響

Effects of Three kinds of Feedback on University Students' Behaviors in the Unsolvable Tasks on their Anticipation of Solving the Subsequent Solvable Ones

中村達大・森山哲美

Tatsuhiko Nakamura & Tetsumi Moriyama

(常磐大学大学院人間科学研究科)(常磐大学)

(Graduate School of Human Science, Tokiwa University) (Tokiwa University)

Key words: learned helplessness, feedback on university students in task, anticipation

## 目的

対処できない嫌悪事象を経験した個体は、後の学習への対処が困難になる傾向がある。この現象は学習性無力(Learned Helplessness: 以下, LH)と呼ばれている。

本実験では、解決不可能な算数課題に取り組んだ大学生が、その課題への取り組みについて以下の3種類のいずれかのフィードバックを受けることで、その後の解決可能な学習でLHに似た行動を示すかどうかを実験的に調べた。フィードバックは、課題に問題があったというフィードバック(TC)と、大学生の課題従事に問題があったというフィードバック(BF)、実験内容と無関係なフィードバック(NT)の三つであった。これらのフィードバックが、課題に対する彼らの予想正答数(以下、予想)に及ぼす影響を群間実験計画法によって調べた。

## 方法

大学生21名(TC, BF, NTの各フィードバック群に7名ずつ分けた)が参加者であった。

算数課題は、カード(5×10 cm)の中央に5つの数値と等号(=)が書かれた課題で、左辺の4つの数字の間に演算子(+, -, ×, ÷)のいずれかを入れて左辺の計算結果と右辺の数値が等しくなるようにする課題だった。1枚のカードに課題は1問で、解決不可能な課題は18問、解決可能な課題は20問であった。

各参加者は個別にプレ課題(解決不可能課題)、フィードバック、ポスト課題(解決可能課題)の順で実験を受けた。課題の制限時間は5分であった。プレとポストそれぞれの課題開始前後に、実験者は参加者に次の課題で何問正解できると思うか(予想)を尋ねた。予想のための機会は、プレ課題実施前(R1)、プレ課題の実際の正答数をフィードバックした後(R2)、ポスト課題前(R3)、ポスト課題の実際の正答数をフィードバックした後(R4)の4回であった。R2とR3の間で、実験者はプレ課題の結果に関わるフィードバックを行った。TCでは

前の課題が解決不可能な課題であったとフィードバックし、BFでは参加者は課題が苦手なようだと言ったとフィードバックし、NTでは実験当日の天候について伝えた。

## 結果と考察

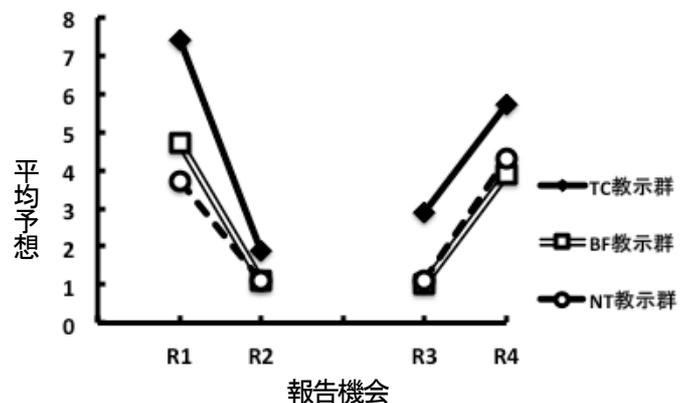


図1. 各群の各予想機会における平均予想

図1は、各群の各予想機会における平均予想を示す。全ての参加者は、解決不可能なプレ課題を経験した後、ポスト課題に対する予想を低めた。その意味でLHに似た行動が予想において見られた。次に、課題に問題があったとフィードバックされた参加者は、ポスト課題への予想を高めたが、課題従事行動に問題があったとフィードバックされた参加者と、無関係なフィードバックを受けた参加者は、ポスト課題への予想を変えなかった。

以上の結果から、解決不可能な課題を経験すると、大学生は次の課題への予想を低下させるが、課題の失敗が外的要因に由来することを知ると予想を高め、課題の失敗が彼らの内的要因によるものであることを知ったり、課題と関係ないことを伝えられたりすると、予想を低めたままであることがわかった。しかし、実際にポスト課題で正答数を増やすと、すべての参加者は予想を高めた。